

はじめに

西林孝浩

29巻2号に続いて今号に掲載されるこの特集は、2016年度および2017年度に立命館大学国際言語文化研究所において萌芽的プロジェクト研究助成を受けて組織された「アジアにおける技術・芸術と社会のダイナミクス」の成果報告である。

2017年度においては、9月と2月に公開研究会を開催した。その発表者と題目は、以下の通りである。

2017年7月24日 第3回研究会（会場：立命館大学アート・リサーチセンター）
廣澤裕介「元末明初の白話資料「全相平話」について」
三須祐介「戯単から見る上海地方劇—新中国建国前後の滬劇を中心に—」

2018年2月2日 第4回研究会（会場：立命館大学アート・リサーチセンター）
林信蔵「音楽愛好と日本近代文学
—永井荷風と村上春樹の文学創造における〈音楽〉をめぐる—」
西林孝浩「中央アジア出身画家 曹仲達について—絵画様式の復元—」

上記の研究会においては、研究メンバーのみならず、院生および学外研究者の出席もいただき、活発な議論を行うことが出来た。主催者として、御礼を申し上げたい。2年間にわたって継続してきた我々の研究会は、この2017年度末で一区切りとし、このプロジェクト独自の研究活動は終了することとなる。2018年度からは、学内のアジア・日本研究推進プログラムの採択を受け、「『アジア芸術学』の創成」として、我々のプロジェクトを含む、学内の複数の萌芽的プロジェクトの成果を継承・統合・発展させ、また海外の研究機関とも連携しつつ、研究活動が行われる予定である。これまで、我々のプロジェクトへ支援をいただいたことに感謝を申し上げるとともに、引き続き、次の「『アジア芸術学』の創成」についても、各位のご助言を頂戴できれば幸甚である。また、今回から引き続き参画予定の研究メンバーには、より一層のご協力をお願い申し上げたい。

なお、29巻2号の巻頭言で、次号すなわち29巻3号において、我々の特集を掲載予定と予告しておきながら、年度を超えて、30巻1号に掲載されることとなった。関係各位には、深くお詫びを申し上げる。この掲載の遅延は、研究代表者（筆者）の怠慢と不手際によるものであり、今回の論文投稿者には、何も瑕疵がないことをお断りしておきたい。

また、この特集において掲載される若手研究者の論文については、掲載にあたって、本研究メンバーによる厳正な査読審査を経ていることを明記しておく。

